



特集 コロナとオリンピック

我々の心臓をひん曲げたコロナ禍の罪深き五輪強行

■ 浜 矩子 (エコノミスト)

「コロナ禍のオリンピックが日本社会に与えたものは何か。私たちはどう行動すべきなのか」。これが今回頂戴したお題だ。またまた、難しいテーマを投げかけられてしまった。

まずは、五輪開催中に何をどう感じたかとい

うところから入って、考え進んでみよう。一つ間違いなく言えるのは、この間ほど、重苦しく、気疲れする日々はなかったということだ。選手たちの必死の挑戦は胸を打つ。惜しみなく喝采を送りたい。だが、この五輪がいかに異様な環

境の中で強行されたかを思えば、テレビ観戦もしたくなくなる。してはいけないと感じる。二つの相反する心理の挟み撃ちに合って、心臓がひん曲がって来る気がする。

なぜ、我々はこういう心境に追い込まれたのか。それは、政府・与党を始めとする五輪関係者が、選手たちの思いを人質にとって開催をぎり押ししたからだ。

この罪深いやり方の背後には、イベントが始まりさえすれば、人々の視線も構えも変わるという読みがあった。選手たちの奮闘振りを目の当たりにすれば、政府批判も鳴りを潜める。コロナ対応のずさんさを非難する怒涛の声は沈黙する。開催にこぎつけたことを感謝する選手たちの姿勢に酔いしれる。すると、激落した内閣支持率も急回復する。こうした計算が働いて、人質大作戦が展開された。

結果的には、この計算は誤算に終わった。人々は罪深き集団が考えるほどバカではなかった。内閣支持率は下がり続けた。我々の心理は、決して単純切り替えスイッチの餌食にはならなかった。そうではなくて、心臓ひん曲がり症候群の餌食になった。我々の魂には、それだけのデリカシーがあった。罪深き集団には、それが見抜けなかった。

なぜ、彼らにはそれが見抜けなかったのか。答えの鍵を握るのが、「バブル」という言葉だと思ふ。エコノミストである筆者にとって、バブルと言えば経済活動の過大膨張を意味する。だが、この間、何かと取り沙汰されたバブルは、このバブルではない。この間に話題になったバブルは、五輪開催中のコロナ感染急増回避策を指していた。競技会場や選手村を、あたかも、すっぽり泡で包み込むようにして、外部との行き来を遮断する。そうすることによって、クラスター発生の余地を絶つという作戦だった。ところが、このバブルにはすぐに穴が開いた。選手を始めとする様々な関係者がバブルの綻びをすり抜けて動き回った。

その一方で、この間にその存在が鮮明に浮か

び上がったもう一つのバブルがあった。そして、こっこのバブルには、綻び発生の余地など全くないことが判明した。鉄壁バブルである。このバブルは、どこにあったか。このバブルは、自民党という名の政党をまるごと包み込んでいた。このバブルは、年季の入ったバブルだ。だが、今ほど、その輪郭が明確に目視出来るようになったことは、いまだかつてなかったと思う。

彼らは、鉄壁バブルによって普通の世の中から完全に遮断されている。鉄壁バブルの中にいる彼らには、普通の感覚に従って物事が動いている世界の空気を感じ取ることが出来ない。だからこそ、この究極の異常事態の下において、何事も無かったように総裁選などというものをやろうとする。臨時国会を開くべしという野党の声に、耳を貸そうともしない。総裁選から総選挙に向かう筋道を巡って、バブルの中だけの駆け引きに余念がない。

これまで、ずっと思案していた。この人たちは一体何を考えているのだろうか。何故、かくのごとく、国会での議論が噛み合わないのか。何故、記者会見などであのように不可思議で突飛な発言をするのだろうか。そして、今、解った。あの人たちは、鉄壁バブルの中で、自分たちだけの論理でとことん汚染された空気ばかり吸っている。だから、ああなる。閉塞的なバブルの中で、特有の進化を遂げてしまった。だから、外界とは全てが噛み合わないのである。

コロナによる災禍が広がる中で、自民党政治を包み込む不気味なバブルの姿が見えて来た。このことを、コロナが日本社会に与えたものの一つに数えていいのではないか。鉄壁バブルの中に生息する連中に、政策の形成や運営を託しておくことは極めて危険だ。正常な感性や論理が働かない体質の人々に政策をつかさどらせていると、我々の命が危うい。コロナ・パンデミック下の五輪強行という暴挙が、このことを我々に教えてくれた。

パンデミックが我々に提起したもう一つの問題は、過大な効率性重視とそのための公益性軽視がもたらす危険の深さだ。小泉政権が「官か

ら民へ」の大号令を発して以来、多くの公共施設が民営化され、集約化され、人員削減にさらされた。こういうことばかりしていると、いざという時に大変なことになる。この間の医療崩壊がその典型だ。何かにつけて自助努力を促し、自己責任で何もかもをこなすことを強いる社会は、危機を目の当たりにして強靭さを発揮できない。「レジリエンス」などという言葉がはやる昨今だ。その意味するところは、粘り、腰頑丈さ、颯爽たるしぶとさなどである。危機に際して、経済社会がこうした力量を発揮出来るためには、それなりの枠組みが必要だ。何もかもを民に丸投げして、公助をさぼる政策姿勢の下で、レジリエンスは曇気楼だ。そのことが、この間に露呈した。

ところで、この間に人々を襲った心臓ひん曲がり症候群にこのほか激しく見舞われたのが、メディア陣ではなかったかと思う。良心的なメディアであればあるほど、そうだったはずだ。イベントが始まってしまえば、選手たちの熱戦を報じないわけにはいかない。報道義務はある。無視は出来ない。最大限ショーアップしてあげたいとも思っただろう。それが仕事だ。だが、一方で反骨のジャーナリズムとしては、バブル内に生きる不心者たちの罪深さは追及したい。この徹底的に相互矛盾する二つのテーマを前にして、彼らの心臓はひん曲がるどころか、引き千切れそうになっていただろう。そうであったことを祈りたい。

選手たちの真摯な言葉に感動しながら、単純に感涙を流していいのかと、忸怩たる複雑な思いに翻弄される。この日々の中で、この人のこの言葉には、素直に感涙を流していいかと思う発言に出会った。視覚障がい者競泳の男子100メートルバタフライで、木村敬一選手が金メダル、富田宇宙選手が銀メダルに輝いた。その直後のインタビューで、富田選手が、「木村くんが一位で自分が二位となって本当に嬉しい。自分はこの日のために障がい者になったのかなと思った」という趣旨のことを言っていた。こう

思える感性が何とも衝撃的に素晴らしい。この感性は、聖霊が彼に与えられた賜物だ。そう思った。神の御前では全てのことに意味がある。全ての人に役割がある。

ここで思い出したのが、ミステリー小説の女王アガサ・クリスティの『ゼロ時間へ』という作品だ。その中で、自殺に失敗して自暴自棄となっている入院患者に、女性の看護師さんが言う。「あなたの人生には意味がある。ある日ある時、あなたがある場所いる。それだけのことで、とても重要な役割を果たすことになるかもしれない。そのために、神様があなたを必要とされているかもしれない」。彼女はカトリック信者だった。

我々の心臓がひん曲がり、自民党政治を覆うバブルを目の当たりにしたことについて、「この日のためだったか」と我々が思う日がきつと来る。必ず来る。富田選手の言葉がそれを確信させてくれた。

回勅『兄弟の皆さん』(FRATELLI TUTTI)

ただ一つの人類家族として、等しく生身の人間である旅人として、私たち皆を宿すこの地球の子どもとして、夢を見ようではありませんか。私たちは皆、それぞれ豊かな信仰や信念を持ち、それぞれ意見を持っていて、だれもが兄弟なのです。(8)

回勅『兄弟の皆さん』は、2019年、教皇フランシスコがアブダビでイスラムの指導者アフマド・アル・タイーブ師と対話し、「殺害されるため、互いに争うため、また、生き方や境遇をもって拷問にかけられたり辱められたりするために人間は創造されたわけではない」と確認しあったことがきっかけとなって執筆されました。

このほど、カトリック中央協議会よりこの日本語版が、奇しくも20年前、米国のアフガン介入の端緒となった同時多発テロ事件が起きた9月11日に発行されました。今年8月の米軍撤退以後、アフガニスタンは混乱に陥っています。私たちが、アフガニスタンの人々の兄弟であることができますように！

コロナ禍のオリンピックとは何だったのか

■ 中野晃一（上智大学教授）

コロナ禍始まって以来最悪と恐れられた第5波がすでに始まり、東京都などにおいて第4回目の緊急事態宣言が発令されている最中に、東京オリンピックは開催された。案の定、東京都をエピセンターとするコロナ感染状況はオリンピック開催期間もデルタ株の拡散によって悪化の一途をたどり、今度はパラリンピックへと向かうなかでも収束の見通しは立たず、PCR検査のキャパシティの限界を反映するかのようになり新規感染者数が高止まりするなか医療崩壊が現実のものとなり、「自宅療養」の名の下に事実上国家に見捨てられてしまった方たちが治療を受けることなく亡くなるケースさえ起きている。緊急事態宣言の対象も次第に全国へと広がり、まさに棄民政策というほかない。

憤りを禁じえないのは、このような凄惨な事態が1ヶ月以上前から十分に予見されていたことだ。想定外の展開などではなく、医療関係者や政府の専門家さえオリンピックを開催する状況にないことを指摘していた。そして圧倒的多数の世論もまた、中止や延期を求めている。

そうであるにも関わらず緊急事態宣言下でオリンピックが強行開催されたことで明らかになったのは、日本の政治だけでなくオリンピックというエリート・スポーツの祭典もまた、全くアカウンタビリティを欠いていることだった。

そもそも日本ではオリンピック反対運動が盛んだったわけではない。むしろオリンピックやIOC（国際オリンピック委員会）、スポーツ業界に関するナイーブな幻想が根強く、それはTOKYO2020と専属契約を結んだ電通を中心にマスコミと経団連企業が総動員される形でスポンサーとなり「挙国一致」でオリンピックが推進されてきたことにも表れていた。

そういう意味では、今回、多くの日本人が初

めてオリンピックの実態についていささかでも知識を得て、嫌悪感すら抱くようになったことは、それだけIOCや組織委員会の非民主的で強権的な体質がむき出しになったからであろう。

筆者は、幼少期をIOC本部のあるローザンヌに近いジュネーブで1970年代に4年ほど過ごし、現地の学校でも近代オリンピックについて学ぶ機会を得た。そういう意味では、オリンピックに慣れ親しむ経験に恵まれた方だと思うが、そんな私に言わせれば、オリンピックの本質とは、19世紀のヨーロッパ白人男性特権階級の差別意識と20世紀のナショナリズムと21世紀の寡奪型のグローバル資本主義の組み合わせにほかならない。オリンピック憲章など悪い冗談でしかない。

バッハ会長を筆頭にIOC理事らの言動や、日本の組織委員会、東京都知事、菅首相らの判断能力のなさや認知の歪み、そして電通やテレビ業界などのふるまいに、国家と資本に巢食う特権階級の傲慢、選民意識、そして愚民観を察知した人も多かった。

なかでも、商業化のすさまじいエリート・スポーツの頂点に立つ選手たちも含めた「オリンピック・コミュニティー」の特権意識をもっとも明白に示していたのが「バブル」という発想だった。東京都などにおいて緊急事態宣言が発令され、医療資源が枯渇するなかで、選手たちを含めたオリンピック関係者が発した言葉は最後の最後まで「自分たちはバブルの中で安全にやっているでお構いなく」がせいぜいで、そうでなければ「暑い」「コンディションが悪い」という不平不満であった。

全人類がパンデミックの危機にあるなかで、優先的にワクチン接種やPCR検査などの医療支援・感染対策をあてがわれ、国家と大資本に特権的に守られていながら、なお一般市民に対す

る気遣いや連帯のようなものは微塵も感じられなかった。むしろ「感動を与えたい」「スポーツの力」などと妄想の域を出ない驕りの世迷い言が、今日のエリート・スポーツのいびつさを暴いてしまっていた。

こうして、国家権力や資本にとって不都合な真実を覆い隠し、国威発揚や商業主義をひたすら追求するための共犯関係がスポーツ業界との間に成立し、英語の「ホワイト・ウォッシュ」が隠蔽を指すことから「グリーン・ウォッシュ」(エコなイメージを利用したごまかし)が派生したように「スポーツ・ウォッシュ」という言葉まで使われるようになったのである。

日本ではオリンピックなどスポーツ報道を担うメディア関係者は、部活や体育に始まる学生スポーツ(体育会)の人脈から採用されており、森喜朗、川淵三郎、橋本聖子、山下泰裕らを頂点に戴くスポーツ業界の一部を成している。コロナ禍の悲惨なニュースにすぐ続けて調子外れに明るいスポーツニュースが流れるのにはそうした事情がある。

筆者はオリンピックに際して多くの海外特派員と接したが、興味深かったのは以下のようなことである。一つは、オリンピックに関係なく以前から東京に駐在している特派員らは、元々日本の置かれた状況に精通しており、私たち一般市民同様にコロナ禍のオリンピック強行に対して反発、危機感を強めて報道にあたっていたことである。他方で、オリンピックのために特別に来日したプレス関係者は、スポーツ専門記者や本国でも著名なキャスターや記者が多く、概して日本については浅薄な知識しか持っていなかった。しかし、彼らも歓迎されると思って到着したら、予期に反して日本社会から招かれざる客と見られていることを知り、この異様なオリンピックについて、政治や社会的背景を踏まえて報道することを心がけた。こうした海外のメディア関係者も、日本同様、スポーツ業界の利害に近い関係にあるわけだが、それでも批判的にIOCや組織委員会、日本政府の対応を調

べ報道する点では、スポーツ業界の一員というよりはジャーナリストとしての気概を見せていたのが印象的だった。

そういう意味では、「海外からの目」の東京オリンピック総括としては、やはり異常かつ凡庸なオリンピックだった、ということになるだろう。つまり、日本が前代未聞の巨額の税金やスポンサー収入を注ぎ込んで強行開催したにも関わらず、結局、東京は「バブル」内に閉じ込められた無観客のスタジオ同然のスタジアムを提供しただけで、対外的に得たものはゼロに等しかった、ということである。どんなに特権的にオリンピックを優遇しても、劣悪なコンディションでの開催となったがために、日本の「メダル・ラッシュ」が虚に見える、総じて凡庸な結果や記録の大会だったということだ。

それどころか、オリンピックのために来日した海外メディア関係者が驚いたのは、日本の「レトロな」(つまり時代遅れでローテク、非科学的な)感染対策や、準備不足、コンディションの悪さであり、あるドイツのジャーナリストは「日本はドイツみたいにハイテクで組織がしっかりしていて有能なイメージだったし、韓国のピョンチャンオリンピックではあちこちにロボットがいたのに、日本ではまるで見かけない。こんな暑さでボランテアが首に小さな扇風機をぶら下げて顔に当てているくらいしか珍しい機械は見かけなかった」といたたまれなくなるような感想を漏らしていた。

コロナ禍に強行されたオリンピックの最大のレガシー(遺産)は、ありとあらゆる意味で底の抜けてしまった日本の姿である。こうした事態を招いたのは、何の民主的な統制も及ばない政治だ。こうした政治を変えていくことから、日本の社会や経済の再生を始めるしかない。せめてこの教訓だけは学びたい。

ドイツで考える

「^{だし}出汁」も役立たずとなった東京2020オリンピック

■ 奥道直子（ドイツ・コンスタンツ教区信徒）

「東京五輪2020」と言えば2013年9月8日ブエノスアイレスでの次の光景を思う。



五輪開催地に決定して歓喜する東京五輪招致委員会のメンバー © AFP=時事

この写真の背景にあるのが、安倍前首相が国際舞台で言った嘘、「the situation is under control」である。そのように獲得したオリンピックは「復興五輪」と名付けられ、東日本大震災の「被災地」が「^{だし}出汁」に使われた。津波という自然災害と、原発事故という人災からなる大震災の復興には、長期にわたる多くの時間・税金・労働力・建築資材を必要とする。国は、それらを被災地に集中的に投入すべきであり、五輪に費やす余裕はないはずであった。「東京五輪2020」を知ったとき、私の脳裏にはある一つの場面が浮かんだ。大邸宅の広間で華やかな宴が催され、その奥の薄暗い小部屋では家族の一人が重病で苦しんでいる、というものである。「華やかに宴会を開くときではないでしょう、病で苦しむ家族の看病に専念するときでしょう」という怒りがこみあげた。

2020年3月。「復興五輪」は「コロナに勝利した証しの五輪、完全な形の五輪」として翌年に延期された。「出汁」の取りかえである。安倍前首相の退任の「花道」とも理解された。

同じ2020年3月。ドイツではCovid-19の爆発的感染抑止のため様々な措置がとられた。保育園・学校の閉鎖、食料品店・薬局・ガソリン

スタンド・青空市場・宅配業・ポスト・銀行以外の営業停止、仕事はホームオフィス、そのほか基本法で守られている多くの自由が、人のいのちを守るために、大幅に制限された。約3ヶ月に渡る最初のハード・ロックダウンだった。その後、同年11月～翌年3月初旬まで続くソフト・ロックダウンがあり、この間、デルタ変異株の蔓延により一日の新規感染者数が30000を、一日の死者数が1200を超える日があった。再びハード・ロックダウンに入ったのは4月初めだった。ホテル・レストラン・映画館・美術館・コンサートホール・フィットネスセンターなどは、2020年11月～翌年5月まで、じつに約7ヶ月間にわたる営業禁止が強いられた。

このような経験をしたドイツ国民にとり、東京五輪は中止されても当然だった。日本の国民の80%が開催に反対しているなど、五輪に関する日本のニュースは詳細に報道されていた。そのようななかで不思議に思ったことは、五輪にこれほど固執する政府は、ワクチン取得と接種のためになぜ早期に手を打たなかったのか、である。パンデミックから自由になるにはワクチンが必須、ということが分かっていたのだろうか。見よ、夏季五輪と同年に開催されることになっている欧州サッカー選手権がコロナのために1年延期されたその決勝戦今年7月11日のロンドンのスタジオを！65000人の観客が観客席を埋め、歓声・落胆の声を振り絞ってあげていた。パンデミックは終わったものとして、後は個人の自由と責任に任せる、という大胆な実験を英国はした。新規感染者数が急増しても、ワクチン接種率が高いので、重症になる人、亡くなる人の数が少ない、という状況判断からの決断だった。その状況は現在なお続いている。英国の奇跡、とドイツで呼んでいる。先見の目・意志・勇気が日本政府に必要だった。

第41回正義と平和全国集会大阪大会(11月22日(月)~23日(火・休))

すべてのいのちを守ろう

—誰も置き去りにしない世界に向けて No one will be left behind—

こんにちは。大会実行委員会事務局からご案内します。

コロナ下の大会のため、今回初めてオンラインで開催することにしました。

大会実行委員会は16名、大阪教区(兵庫・大阪・和歌山)の7地区から、司祭3名と修道者、各地区の信徒が集まり、分科会、2つの特別プログラム、ITサポートについてそれぞれチームに分かれ、オンラインで話し合っています。

オンライン開催で、果たして参加者が集まるのかと不安でしたが、分科会は30の申し込みをいただき嬉しい悲鳴をあげています。

初めての試みのため「ZOOMってなに、ホスト? ファシリテーター?? 祈りのつどい??? オンライン上でどうするの?」などの声が上がっていますが、「ピンチをチャンス」にしようと各プログラムの主催者の皆様にご協力ご助言いただきながら準備を進めています。

分科会では次の4つのステップを考えています。

1日目

①See 理解する

テーマについての学習。証言や報告者のレポート、講演、パネルディスカッション……等を通して学び、問題点等を理解する。

②Listen 聴く

みことばと祈りの集いを通して、福音的メッセージを聴き、黙想し祈る。

2日目

③Share 分かち合う

ステップ①での学びを振り返ったうえで、小グループに分かれ、受け止めたこと、疑問、感想、新たな気づきなどを分かち合う。

④Act 行動する

みことばに照らして自分たちに求められる生き方は何かを考え、具体的な目標と行動計画を作成し、一人ひとりが自分の生き方を考えることを目指す。

様々な地域の方々が多岐にわたるテーマについて、問題提起だけではなく、課題の克服、成

果などについても話していただける分科会を開いてくださいます。詳しくは大会パンフレットをご覧ください。



また、2日目には特別プログラムを2つ設定しました。

『みんな地球人』。特別講師に星野ルネさんを迎えて、ルネさんの漫画を紹介しながら、子どもと保護者、青年、海外にルーツのある方々と一緒に身近にある「違い」について考えていきます。

なにげなく話したり、行動している自分の“当たり前”が“当たり前”じゃない人がある。今回は、そんな日常に潜む“自分と違ってみえること”、「違う」とはどういうことなのかを一緒に考える時間になりたいと思います。同じ地球人として、“人”を“人”として接する大切さ、広い視野と受け入れる心を得るきっかけになればと願います。

もう一つは中高生向けプログラム『正義と平和 Youth Forum』です。人類がこの地球で暮らし続けるために達成すべき目標「SDGs」を取り上げます。この目標に向けて自分たちに何ができるかを考えます。

今は人と出会う機会が減っていますが、オンラインでも全国の中学生・高校生が交流するチャンスです。「探求」の授業で学習してきた「SDGs」「違い」「コロナ禍で見えてきたこと」「難民」「RDD(世界希少・難治性疾患の日)」などについて発表が予定されています。発表を観てから気になるテーマについて、ブレイクアウトルーム(小グループ)で互いの考えや感じたことを分かち合い、交流の場にします。

今までにはないオンラインという開催形式ですが、インターネット環境が整っている人もない人も互いに声をかけあってご参加いただければと願っています。

大会パンフあります。また、お困りの方、ご不明な点などおありの方ご連絡ください。

大会事務局 ☎06-6942-1784

✉jptaikai@osaka.catholic.jp

ビキニ水爆実験被害者 大石又七さんの願い

市田真理（都立第五福竜丸展示館）

—このバクダンを二度と、繰り返さないためには、「ダメだ、ダメだ」と言い続ける—

今夏、長崎市平和宣言の冒頭で小崎登明さんの言葉が読み上げられたとき、私は「ああ、これは大石又七さんの声でもある」と感じました。

大石さんは、1954年3月1日、アメリカがマーシャル諸島ビキニ環礁でおこなった水爆実験により被ばくした第五福竜丸の乗組員でした。アメリカは広島と長崎への核攻撃から一年も経たない1946年7月から太平洋を核実験場にして、核兵器開発をすすめてきました。マーシャル諸島ビキニ環礁、エニウエトク環礁などでの実験は67回に及びます。広島に投下された原爆の約7200発分に相当します。

2019年秋、教皇フランシスコが訪日されるというニュースを観た大石さんが思い立ったのは、ビキニの核実験被害についても知ってほしい、発信してほしいとお伝えすることでした。

原爆被害者だけではなく、核実験で被ばくした人もいることを忘れないでほしいと切望され、正平協の皆さまのお力添えで教皇様にお手紙を差し上げるに至ったことは、本誌220号（2020年2月）でもお知らせした次第です。

「自分事」だったビキニ事件

水爆ブラボー実験は日本時間3月1日未明に行われました。ビキニ環礁海域で操業中のマグロはえ縄漁船・第五福竜丸では、乗組員たちが縄を仕掛け終えて、束の間の休息をとっていました。爆発の閃光は水平線の彼方から船に届き、やがて空一面が真っ赤に染まったといいます。そして8分後の轟音。この時間差により実験場から約160km離れていたことが後日判明します。やがて空から「死の灰＝放射性降下物」が降り落ちてきます。これは砕かれたサンゴの破片で、放射性物質をまとった物体でした。死の灰は皮膚に付着し、目や耳の中にも容赦なく

入り込んできたといっています。私は大石さんに「その時怖くはなかったですか？」と繰り返し尋ねましたが、わからないものは怖がれない、作業の邪魔になるものとしか思えなかったとの答えでした。恐怖とは、知識や情報



学生に話す大石又七さん

とセットなのだと痛感します。「怖がれなかった」大石さんたちは、可視化された「死の灰」以外にも、塵状のものを吸い込み、水や食料に付着したものを体内に取り入れた可能性もあります。しかし怖がることも除染することもしませんでした。母港・静岡県焼津港に帰港するまでの2週間、頭痛や吐き気、皮膚疾患（β線火傷）、脱毛などに見舞われましたが、もちろん治療する術もありませんでした。

大石さんたちが、自分たちの身に起きたことを知ったのは、帰港後の読売新聞報道が出てからでした。水揚げされた魚はすでに流通に乗っており、市場関係者は大騒ぎとなります。

第五福竜丸の漁獲物から放射能が検出され、大半が廃棄処分されました。厚生省（当時）が指定した5港（塩釜、東京、三崎、清水、焼津）ではマグロ類の全頭検査と船や乗組員の検査が行われ、次々に被災が発覚します。最終的に全国18港で検査がおこなわれ、少なくとも延べ992隻が漁獲物を廃棄する事態となりました。

さらに5月になると、雨から放射能が検出されるようになります。3月1日のブラボー実験のあとにも5回の水爆実験が行われ、吹き上げられた「死の灰」は成層圏に達し、雨に混じって遠く日本にも降り落ちたのでした。

魚が危ない。雨が危ない。

我が家の食卓にしのびより、我が身に降りかろうとする放射能。誰もが他人事にはできませんでした。各地で自発的に取り組まれた原水爆実験反対に署名した人は、合計3200万人を超えます。日本の人口が8000万人の時代でした。

差別と嫉妬にさらされて

澎湃^{ほうはい}とわきあがった反核世論に危機感を抱いた日米政府、とりわけ米政府は事件の早期解決に動きます。政治決着と反米感情の鎮静化です。

第五福竜丸に関することは「直接被害」、それ以外の漁船の被害や市場の混乱、魚価値下がりなどはすべて「間接被害」であるとして、補償交渉の対象から外します。一方で「死の灰」は危険ではないとする「学説」の流布、原子力平和利用に関する啓蒙など、着々と立案・実行していきました。

被災から半年後、9月23日に無線長・久保山愛吉さんが亡くなります。外交交渉は加速し最終的に200万ドル（7億2000万円）の見舞金支払いで決着します。

この政治決着のポイントは、アメリカの法的責任を問わないことが明文化されていること、「補償金」は日本政府への一括支払いであることです。各々の被害への賠償ではなく、丸投げされた日本政府によって配分が決められました。4月28日の閣議決定では補償金ではなく「慰藉料」と名称も変わります。水産業界へは合計5億8000万円が支払われましたが、24億ともいわれる被害ですから、それぞれ船や船員に十分にいきわたるはずもありません。不満は「補償された第五福竜丸」に向けられます。

退院した大石又七さんに聞こえてきた言葉は「騒ぎをおこして、治療も受けて、金をもらって元気だ」、「うちの人も灰をかぶってくればよかった」といった羨望嫉妬からくる陰口でした。

亡くなった久保山愛吉さんの妻・すずさんへは、たくさんのお見舞いの手紙に交じり、原爆被害者から「私たちは省みられることなく苦しんでいるのに、あなたの夫は十分に治療を受けたではないか」「原爆で家族を失ったが、一銭

の見舞金も受け取っていない」といった怨嗟の言葉が綴られた手紙が届きました。

忘却に抗う

核実験場となったマーシャルの、いまなお続く被害も忘れることはできません。マーシャルは日本からも米本土からも遠く離れており、「辺境」のように認識されるかもしれませんが、核開発競争の最先端で被害を受けました。「死の灰」で汚染され故郷を脱出し、いまだ帰れないロンゲラップ環礁の人びと、核実験場にされたことで強制移住させられたビキニ環礁の人びと、核実験で作られたクレータに核廃棄物を投棄しコンクリートドームで蓋をした「ルニット・ドーム」を抱えるエニウェトク環礁の人びと、米から核被害のあった環礁と認定されていない、環礁の人びと…。

私たちが目をこらして見つめなければ「なかったこと」にされてしまいそうな核被害が、地球のそこここにあります。私たちが忘れても地球は忘れない。私たちが知らんぷりしても、核の傷は消えることも癒えることもありません。

核兵器・核エネルギーの原料となるウラン採掘、精錬から加工、それに伴う廃棄物に至るまで核サイクルはあらゆる工程で被ばくを引き起こします。その現場の多くが中心ではなく辺境、大都市からは遠い土地です。そうした場所が核開発の最先端にさせられていることを、ビキニ事件は告発します。

ダメだ、ダメだ…。

核兵器の存在を認めるわけにはいかない。それが大石又七さんが命を懸けて訴え続けてきたことです。

忘却に抗い、最後まで声を上げ続けたビキニ水爆実験被害者大石又七さん。このほどバチカンより「大石さんの努力は何世代にもわたる繁栄と自由の未来に向けて実を結び続けると教皇は確信している」とのお手紙をいただきました。大石さんから託されたバトンを、次世代へと繋いでいくことが、遺されたわたしの仕事なのだと、あらためて痛感します。

傷ついた地球を癒すために 一回勅『ラウダート・シ』の呼びかけと応答

中井 淳 (下関労働教育センター)

社会教説行脚3年目は、回勅『ラウダート・シ』を材料に環境問題をテーマとして取りあげました。当時(2019年)、山口県萩市に政府によるミサイル基地イーグリス・アショアの建設計画が進められており、地元住民の会の反対運動に連帯する正義と平和協議会の動きは、私の背中を後押ししてくれました。福島原発事故被災地など、いくつかの忘れることのできない場所を訪れた経験も分かちあいました。『ラウダート・シ』の一章は、心の痛みを感じながらこの地球が危機に晒されている現実を眺めることから始まるからです。

ただ一般的な環境問題について語るのではなく、『ラウダート・シ』の特異性を強調したいと思いました。ある友人が提案してくれたのは、使徒的勅告『喜びに喜べ』も統合させながら話をするということでした。実は、『ラウダート・シ』と『喜びに喜べ』は二つで一つの本であり、お互いを補完しあっているのです。

『ラウダート・シ』で何度も繰り返される言葉に「総合的(原文はインテグラル)エコロジー」というものがあります。環境問題の背景には、さまざまな問題が密接に関係しており、それらを包括する展望をもった取り組み方をしていかなければなりません。地球の気候変動などで被害を受けるのは脆弱で周辺に追いやられている人々です。そのため、環境の問題と経済格差の問題を切り離すことはできません。また、技術によって環境問題を解決しようとするのではなく、技術至上主義になってしまっている現代の構造に根本原因があり、文化、人間一人一人のあり方の変容、地球を大切にするとエコロジカルな霊性が育まれていかなければならないということが、「総合的エコロジー」の考え方です。

日本語版の訳者あとがきによると、このインテグラル・エコロジーという言葉はどう訳すかで一ヶ月ほど議論がなされたそうです。訳者はそれを「全人的エコロジー」と訳したかったのですが、一般的に使用されている言葉の方がわか

りやすいということで最終的には「統合的エコロジー」という訳語があてられることになりました。全人的、つまり、人間が全き人間としてあるエコロジーとは何でしょうか。教皇フランシスコは「人間性の刷新なしに、自然とのかかわりを刷新することは不可能です。適切な人間論なしのエコロジーなどありえません」(118)と言います。つまり、人間とはどのような存在であるのかが問われなければならないのです。その人間論が語られているのが『喜びに喜べ』であり、教皇になる以前から熱心に環境問題に取り組んでいたフランシスコがどうしても書きたかった回勅『ラウダート・シ』はこの念願の使徒的勅告によってさらにそのメッセージが強められるのです。

『喜びに喜べ』は、私たち人間は、神への信頼なしにその人生を真の意味で完成することはできないのだと説きます。現代の誘惑の一つとしてのペラギウス主義に警戒しなさいと呼びかけます。それは自分の力で完全になれると考えることの傲慢さに警戒しなさいということです。これが技術至上主義、人間が地球を支配しようとする、原発の安全神話の温床となるのです。

その照らしの下でもう一度『ラウダート・シ』の2章で語られる天地創造の物語を読むとき、私たちはこの世界の被造物一つ一つを「これでよい」と見つめられた神の眼差しへと招かれていることに気づきます。自分自身を、周りの人々を、世界の被造物をそのままざしで見つめながら賛美していくこと。このあり方への回心が呼びかけられているのです。

環境問題というとあまりに大きすぎて何をしようか戸惑うものです。しかし、そのような土台に立ちながら、一つ一つの小さな呼びかけにこたえていくと、その種が成長し、パンが増やされていくという体験もしていきます。そのような体験を、回を重ねながら皆で分かち合うことのできる社会教説の時間になっていると感じます。



女に石を投げたのは

■ 宇井彩野 (フリーライター)

「フェミサイド」という言葉を、ニュースの話題で耳にした人も多いのではないだろうか。8月6日に起こった、小田急線電車内での刺傷事件。重傷を負った20代の女性は一命をとりとめたそうだけれど、加害者の「幸せそうな女性を見ると殺してやりたい」などという発言から、フェミサイド(=女性憎悪殺人)を目的とした犯行だったのでは、という議論が起こった。

新約聖書においても、フェミサイドを思わせる場面がある。イエスの前に、ファリサイ派の人々が姦通の罪を犯したという女性を連れてきて、律法通り石を投げて殺すべきかと問う(ヨハネ8・3)。律法に定められていたとはいえ、当時行われていたこの処刑が「ふしだらな女を罰したい」という人々の欲望の発露として機能していたのでは、と想像する。この時のイエスの対応は、目の前で行われようとしているフェミサイドに対して不十分なものにも見える。「あなたがたのうち罪を犯したことの無い人が、まずこの女に石を投げなさい」というイエスの言葉に、平気で石を投げる者がいなかったのが幸いだ。誰が一番に石を投げるほど立派な人間かという、個人の序列に論点をすり替えたことが、イエスの知恵だったのかもしれない。集団に向けての「罪がなければ投げてもいい」という言葉だったら、残酷な石打ちの刑はすぐさまこの場で行われていたかも知れない。

イエスはある時には、律法における「姦通の罪」が、当時の社会において一方的に女性にばかり罪を負わせるものになっていることも指摘している。

聖書に登場する女性の賃労働と思しきものは、セックスワーカーとしての働き方のみである。女性は男性の経済に養われ、家事労働をすることが当たり前だったのだろう。そんな社会状況で、結婚相手の男性に離縁状を突きつけられた

ら、女性の取りうる選択肢は限られている。

「妻を離縁する者は姦通の罪を犯すことになる」(マタイ5・32)という言葉は、妻が追い込まれる状況をわかっていて離縁する夫を問いただしているように聞こえる。生きていくためにセックスワーカーとなる女性ばかりが姦通罪を問われ、その状況を作り出した男たちが何の罪にも問われないのはおかしいではないか、と。

性的サービス業の大多数が〈異性愛者の男性客〉を想定している現代においても、不均衡さはイエスの時代とさほど変わらない。風俗を利用する男性よりも、風俗業に従事する女性の方が、圧倒的に恥や罪のイメージを背負わされる。

こうした不均衡が、「女を罰したい」という人々の思いを、世の中の風潮を、増幅させる。人は「罰したい」と思った相手のどんな細かな特徴からも落ち度を見出そうとする。

姦通の罪を犯す女、服や髪に金をかける女、家事を怠り外で働く女、働かず家ですくんでいる女、ベビーカーを押す女、街で、駅で、賑やかに話している女たち。

ふしだらだ、浮ついている、迷惑だと、規範から外れる者への懲罰感情は、男性の中にだけでなく女性の中にも存在する。しかし、この種の懲罰感情の矛先は、男性よりも多く女性や性的マイノリティに向かう。

石打ちの刑はいまやインターネット上の攻撃に代わり、顔の見えない人々が誹謗中傷の石礮^{いしづぶて}を投げる。そしてそれは、いつ物理的な暴力に変わるかわからない。実際に振るわれた暴力は、社会が作り上げたものだ。

イエスですら、この暴力の波を根本的に止めることはできなかった。イエスの時代から引き継がれた課題は、いまだ大きく立ちはだかっている。差別が暴力を生み出していることに、まず私たちは気付かなければならない。



- 1 特集 コロナとオリンピック
我々の心臓をひん曲げたコロナ禍の罪深き五輪強行 …… 浜 矩子
- 4 コロナ禍のオリンピックとは何だったのか …………… 中野晃一
- 6 ドイツで考える
—どの「^{まし}汁」も役立たずとなった東京2020オリンピック
…………… 奥道直子
- 7 第41回正義と平和全国集会大阪大会 …………… 大阪大会実行委員会
- 8 ビキニ水爆実験被害者 大石又七さんの願い …………… 市田真理
- 10 (連載第3回)
カトリック社会教説 一步一步
傷ついた地球を癒すために
— 回勅「ラウダート・シ」の呼びかけと応答 — …………… 中井 淳
- 11 (連載第13回)シロツメクサの花かんむり
女に石を投げたのは …………… 宇井彩野
- 12 苦虫のつぶやき …………… 塩田 希
まんが「神学生トマス」

表紙写真 7月18日夕方、IOCバハ会長の歓迎会が迎賓館赤坂離宮（東京）で開かれた。迎賓館前にはコロナ禍での東京オリンピック開催中止を求め、多くの市民が集まった。（撮影：金浦蜜鷹）

苦虫の
つぶやき

コロナ禍に思う

つい先日まで、メディアのニュースは必ずコロナウイルスの感染者数と死者数の公式発表で始まり、感染予防のための各人の行動に対する自粛要請で締めくくる、というパターンであった。公共放送の立場からやむを得ない場合もありうるが、日本人の国民性から考えると、かつての官民一体となった「無らい県運動」の二の舞を踏むのではないかという危惧の念を抱いたのは私だけではあるまい。1973年から75年にかけて、私は南インドのタミール州で「イエスの小さい兄弟会」の修練期を過ごしたが、最も驚いたのはらい菌に感染し、手足顔などが明らかに変形している患者さんたちが堂々と村の集会に参加し、なかにはヒンドゥ教の教えの語り部として“活躍”している人たちもいた、ということである。インド人の心の大らかさだけでなく、建国の父マハトマ・ガンディの思想と発言をも垣間見る機会となったのである。

ところで、コロナ感染の渦中にある私たちはどう生きたらいいのだろうか？…？ルカ福音書の中に「疫病」という一言がある（ルカ21・11）。その前後を読むとまるで現在の世界情勢を読んでいるかのようだ。コロナという疫病が蔓延する渦中において、多くの人は医学の知識とその技術の恩恵を受け、同時に人間の知恵に振り回されている。今こそ、天地万物の創り主であられる主キリストの知恵、福音に戻る時であろう。

塩田 希（日本カトリック正義と平和協議会委員、イエスの小さい兄弟会）

編集後記

2年越しの国内の懸案事項だった東京五輪が、結局、開催され、開催と同時にコロナが爆発、都内は5000人を超す新規感染者数を連続記録した。東京五輪を強行した菅政権は終わり、JP230が発行される頃、次の日本の首相が決まっている。「正義」と「平和」を愛するなら、どうか新回勅『兄弟の皆さん』の言葉を聞いて下さい。「多くの人にとって、今日、政治は不快なことばであり、この事実の背景には、一部の政治家による度重なる、過ち、汚職、無為無策があることは無視できません」「ですが、政治なしに世界は機能するでしょうか。よい政治なくして、普遍的兄弟愛と社会平和に至る有効な道は見いだせるでしょうか」（176）。「苦しむ人に寄り添うことは愛のわざであり、その人と直接かかわらなくても、その苦しみの原因となる社会の状況を変えるための行いは、すべて愛のわざです」（186）。この愛が、政治の精神の核だと、教皇は言う。（h）



発行日 2021年10月1日（隔月発行）
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円（送料共）
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>